

# 住井すゑとその文学の里(三十四)

## ―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

### 牛久沼の風物詩

#### 田舟による漁獲と犬田一家

昭和61年(1986年)の6月に大野正雄初代市長の下で制定(起草委員長は市議会副議長の海老原郁夫氏)して庁舎門柱脇に建てられた市民憲章碑に「(一)水と緑を愛し美しいまちをつくりましょう」とあるが、その文中の『水』を最も象徴するのが牛久沼である。

牛久沼の地籍は龍ヶ崎市佐貫字牛久沼という。

周囲25km余り、面積が2・95km<sup>2</sup>余りで、かつては下流村々(現龍ヶ崎地域)の水田の水源としての役割を果たしていた牛久沼。

明治22年(1889年)に近代俳句の創始者正岡子規は、牛久沼を通じて水戸に向かっていっている。その時、子規が詠んだ俳句『寒そうに鳥のうきけり牛久沼』。

住井すゑがこよなく愛していた牛久沼。

小川芋銭が『五月雨や月夜に似たる沼明り』と俳句に詠んだ牛久沼。

芋銭にはあまたの友人がいたが、小杉放庵画伯もその1人であった。放庵が芋銭を追想して詠んだ歌に「牛久沼清淵芋銭大居士の墓のほとりの藪椿かな」というのがあり。

ところで牛久沼では昭和40年(1965年)代まで沿岸に住む半農半漁の人々の四季を通して田舟による漁獲が見られた。春から夏にかけてハヤ、ヘラブナ、ワカサギ、コイ、ヤマベ、サヨリ漁が盛んだった。

真夏8月はボラ、9月はハヤとヘラブナの漁期だった。厳冬12月から1月は寒ブナ、タナゴなどが捕れた。

牛久沼でのフナの捕り方には投網あみを打つほかに、伝統的な「おだ」「見取り」があった。「投網」は昔は手作り、4メートル四方の網を文字通り広げながら投げる漁法。「おだ」は細い木と枝木と竹たけを持て四方から囲んでフナを寄せて捕る漁法だが、「おだ」には9メートルもある大きなものもあった。「見取り」は田舟で魚影を求め、その魚影の

濃いところを網ですくい取る方法だ。外にうけ、張網、回網の漁法があり、それらで捕獲した小魚は東京江戸川方面へ出荷され、「すずめ焼」甘露煮あまみになつて都民の食卓をにぎわした。

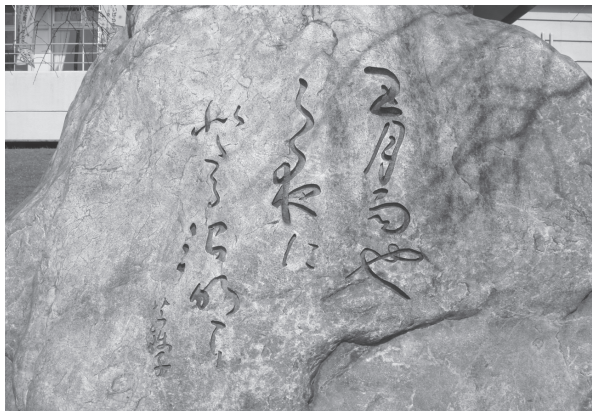
犬田卯にとつて田舟こぎは昔取ったきねづかである。彼は体調のいいときに田舟をこいで沖合に出て「見取り」による寒ブナを捕った。寒ブナは甘露煮になつて犬田家の食卓に上がった。

牛久沼のウナギの場合は、まず夕方、田舟で沖合に出て、80m余りもある長袋網を仕掛けておき、翌日早朝これを引き上げるという独特の捕獲方法が編み出されていた。昭和40年代まで続けられていた。浅瀬では、別に1メートルほどの竹筒(タガツポと呼ばれていた)の中にえさのエビガニやミミズなどを入れておいてウナギをこれに誘い込んで捕らえる法があった。

昭和32年(1957年)度の牛久町の牛久沼に関する記録を引用してみると、当時は水生多年草ヒルムシヤスイレン科の一年生水草オニバスと多年草の河骨かわほねが自

生していた。それに沼の中央へ半島状に突き出した弘法岬こうぼうさき(現つくば市下岩崎字泊崎)といわれる高台の下の岸辺付近に「じゅんさい」が生していた。

牛久沼のじゅんさいについては住井の二女増田れい子著『母住井すゑ(海竜社刊)』に詳しく記されている。そのくだりを抜粋・要約してみた。『少女時代(昭和10年代後半)の夏の沼では楽しい思い出が多い。岸辺に河骨の花が点々とし、沼の水深が浅くなり中央まで浅瀬と化して、そこでじゅんさいが掘れ、泳ぎの練習ができ、じゅんさいがよく採れた』とある。じゅんさいは酢の物になつて犬田家の食卓を彩った。



↑小川芋銭の俳句『五月雨や月夜に似たる沼明り』の碑。この句碑は昭和63年(1988年)の2月に小川芋銭生誕120年祭を記念して三日月橋生涯学習センター庭園に建立された。

※広報うしく11月1日号10ページ「住井すゑとその文学の里(三十三)」に掲載の「牛久沼の浮田の写真」を撮影し寄贈していただいた方が判明しました。写真家の石引昭氏(龍ヶ崎市若柴町在住)です。